



ふかしんメッセージ[㊦] — 校長から香住のみなさんへ —

令和6年1月29日(月)

「4年ぶりの予餞会」

先週木曜日1月25日は、新型コロナの影響で4年ぶりの本格開催となる第31回「予餞会」が行われました。新型コロナ禍では「予餞会」もオンラインによる映像によるものでしたが、久しぶりに全学年が体育館に集まった「予餞会」となりました。とはいえ、3年生から1年生まで誰一人として通常の「予餞会」を経験した人はいないという状況でした。

「予餞会」とは「^{あらかじ}予^{はなむけ}め餞を送る会」のことを言います。「予餞会」の「予餞」は、古来「旅立ちや門出の前に詩歌や贈り物を送る」ことから来ています。現在では「卒業生を送る会」、卒業していく先輩たちに感謝とエールを送る会と位置付けられ、「学習指導要領」の「特別活動」においても文化的行事の学校行事として明記されています。

3年生については入試直前ということもあり、当日は感染防止や体調管理に万全を期すための教室でのオンラインと体育館の2班に分かれての参加となりました。前日までの厳しい寒さも少し緩みましたが、体育館では4台の大型ジェットヒーターをフル稼働させ、生徒のみなさんは特別に通学時と同じ完全防寒対策のいでたちで参加してもらいました。オープニングの吹奏楽部の演奏、書道部のパフォーマンス、有志のみなさんによるダンスや歌の出し物、各部活動からのビデオメッセージ、37期生の高校生活3年間を振り返るスライドショー、そして3年生と1、2年生とのエール交換、全校生徒での校歌斉唱で幕を閉じました。どの内容も思いのこもった心温まるものばかりでしたが、なかでも3年生と1、2年生とのエール交換は、3年生から1、2年生に「これからの香住丘を頼んぞ！」という伝統のバトンが渡されたように感じ、グッと胸に迫るものがありました。

翌日、体育館での「予餞会」に参加した3年生と話す機会があったのですが、「体育館での『予餞会』に参加して本当に良かったです！」「『予餞会』ってあんな行事なんだと初めてわかりました！」「用心のため教室で参加した友だちも、自分も体育館で参加すればよかったと話してましたよ。」と口々に嬉しそうに語ってくれました。1、2年生の「思い」がしっかり3年生に届いたことが実感できて、「『予餞会』をやれて本当に良かったです！」と心から嬉しく思ったことでした。

4年ぶりの「予餞会」がこのような形で開催することができたのは、1、2年生の生徒会のみなさんが中心となって頑張ってくれたからに他なりません！ 誰も見たことも経験したこともないこの「予餞会」という学校行事を企画・運営することが至難の業であったことは改めて言うまでもありません。11月から新たに担当していただいた生徒会顧問の先生の御指導の下、生徒会のメンバーが強力な「チーム」力を発揮し、厳寒の中でのリハーサルをはじめ、周到な準備を積み重ねてくれたお陰で、充実した内容が見事に予定時間通りに進行し、4年ぶりの開催であったにも関わらず、本来の「予餞会」と何ら遜色ない立派な「予餞会」を作り上げてくれました。この「予餞会」に関わった生徒会をはじめ、有志、部活動の1、2年生のみなさんの尽力に心から感謝したいと思います。

本校では、香焔祭、体育祭、予餞会を「三大大行事」として位置付けていますが、この三大大行事をはじめとする「学校行事」や世の中の大きな行事・イベントというものは、参加者にとっては「計画通りに上手く行って当たり前」なのかもしれません。しかし、それは決して「当たり前」のことではありません！ 全ての行事・イベントが「計画通りに上手くいく」ことは並大抵のことではないのです。そこには、行事・イベントに参加している人々の目には見えないところでの、企画・運営に携わっている人たちの長期間にわたる、周到で緻密な計画・準備、運営があるからだということを忘れる訳にはいきません！ こうした人たちのお陰で、私たちは様々な行事・イベントに参加し、楽しむことができます。香住丘のみなさんには、香住丘の学校行事では言うまでもなく、社会に出てからも、こうして目に見えないところで私たちが様々に支えてくれている存在があることを忘れず、感謝できる人たちであってほしいと願っています。

今日で能登半島地震の発災からちょうど4週間になりました。今なお、石川県内13市町村290ヶ所の避難所に1万人近い人々が避難を余儀なくされています（1月25日現在）。親元を離れて、金沢市内等での集団生活を送っている中学生のことや、漸く、道路が寸断され孤立していた集落の孤立状態が解消に向かったり、避難所への支援物資等の供給も軌道に乗り始めたとの報道もあります。その一方で「災害関連死」で亡くられる人が出ていることは気になるところです。今は、被災された方々の一日も早い生活再建と復興を願うばかりです。

元旦からの辛い報道が続く中、一筋の光のような明るいニュースが、JAXAの小型月着陸実証機SLIM (Smart Lander for Investigating Moon) の月面着陸成功のニュースでした。SLIMは、

「月の狙った場所へのピンポイント着陸」「着陸に必要な装置の軽量化」、「月の起源を探る」といった目的を小型探査機によって月面で実証する計画です。日本初の月面着陸成功、そして世界初の月面へのピンポイント着陸成功という快挙を成し遂げました。月面へのピンポイント着陸は、狙った場所から約55メートル離れた場所への着陸だったそうですが、小型探査機のエンジンの破損がなければ数メートルの誤差での着陸ができていたということです。それでも月面へのこの100メートル以内のピンポイント着陸は世界が驚愕する正確さでした。月面へのピンポイント着陸は、将来的な月への基地建設等を見据えた月の水資源探査のために不可欠な技術であり、各国も競って研究を進めていましたが、それに先んじて日本が成し遂げた快挙でした。

小型探査機がエンジンの破損による着陸時の姿勢異常（エンジン上向きの「逆立ち」状態、太陽電池パネル西向き）をきたしていたことで太陽電池パネルに太陽光が当たらない状態でしたが、太陽の向きが変わったことにより今朝から電源が復旧し、SLIMは運用を再開し、早速月面の岩石の観測を実施しています。また、SLIMの状況を撮影して地球に送信してきたのは、JAXAと株式会社タカラトミー、ソニーグループ株式会社、同志社大学の四者で共同開発した変形型月面ロボット（LEV-2、世界最小・最軽量の月面探査ロボット）でありました。このLEV-2は、SLIM（LEV-1）と共に日本初の月面探査ロボットになり、世界初の完全自立ロボットによる月面探査、世界初の複数ロボットによる同時月面探査を達成しました。

資源に恵まれないわが国が世界有数の経済大国となり、今日の国際的地位を確立し、世界中から一定の尊敬を持って迎えられるようになったのは、こうした科学技術とそれを生み出した人材によるものであることは改めて言うまでもありません。気候変動をはじめとする地球的規模での様々な環境問題が深刻さを増している今日、SDGsの理念を活かし、こうした地球的規模の課題解決のためにも科学技術の力で貢献していくことが、わが国に課せられたミッションではないかと思うのです。今回のSLIMの成功は、それを力強く示唆し、勇気をもたらすものでありました。本校での学びの基礎の上に、香住丘からこうした科学技術を担う人材が出てくれることを大いに期待し、願わずにはおられません。

校長 深瀬 信也